

令和３年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【学校理念】「真善美」を校訓に、豊かな人間力をはぐくむ
【教育方針】
1. 「鍛える」 頑張ることができる力（心・体・知のトータルバランス）
2. 「見守る」 十人十色の個性と成長、集団の力
3. 「高める」 豊かな教養・人権感覚・国際感覚・他者貢献
【めざす学校像】
生徒の自己実現を図るため、多様な社会でたくましく生きる力を引き出し育て、一人ひとりの希望する進路を実現する。
1. 学力を伸ばす～基礎・基本の徹底、他者との協働の中で考え自分の言葉で説明できる力の育成を図る
2. 能動的に学ぶ姿勢を身につける～チャレンジ精神を持って進路を切り拓く実践的な態度を育成する
3. 学校力のパワーアップ～保護者や地域の連携を大切にし、生徒の生きる力を引き出し育てる学校

2 中期的目標

生徒の自己実現を図るため、多様な社会でたくましく生きる力を引き出し育て、一人ひとりの希望する進路を実現する
1. 学力を伸ばす～基礎・基本の徹底、他者との協働の中で考え自分の言葉で説明できる力の育成
（1） 3年間の学習目標と計画「寝屋川高校スタンダード」の策定
（2） テンミニッツの活用で学習意欲・学習習慣を身につける
（3） ICT 機器やタブレットの積極的活用、授業形態や授業方法の研究を進め、系統的・効果的な教科指導の確立を図る
（4） 授業評価や研究公開授業・内外の研修等を通して、教員一人ひとりの「授業力」のさらなる向上をめざす
（5） 講習、補習の計画的実施と内容の充実
（6） 新学習指導要領や観点別評価及び大学入学共通テスト本格実施に向けた準備と対策
※大学入学共通テスト 対全国平均得点率 10%アップ（令和2年度 大学入学共通テスト全国比較 3%ダウン）（H30/5%・R1/5%・R2/3%） （得点率をあげることで、国公立大学や難関私立大学への受験希望者の第1希望の割合を維持する。）
2. 能動的に学ぶ姿勢を身につける～チャレンジ精神を持って進路を切り拓く実践的な態度を育成する
（1） 新たな時代に対応する3年間のキャリア教育計画・進路指導の改善・進路ガイダンス機能の向上に取り組む
（2） 生徒主体のHR 活動や行事の企画運営や生徒会活動・部活動の充実を進め、自立心や主体的に行動する力を養う
※R1年度に「寝屋川高校は一つ「いのち・絆プロジェクト」～全日制定時制をつなぎ、そして地域から世界に発信する寝屋川高校～」をテーマに学校経営推進費の支援校に決定
※食堂を活用した事業展開を進めるために改装
壁の塗装・ミーティング用可動式テーブル・椅子・遮光ロールスクリーンを設置（220万円） 生徒会全体の取組みを地域へ広げていく。
（3） 人権教育や総合的な探求の時間等の取組みを充実させ、他人を思いやる豊かな心や人権尊重の精神や国際感覚の育成を図る
（4） 生徒のコミュニケーション能力、文章や情報を読み解き対話する力を向上させる取組みを充実させる
（5） 社会貢献やボランティア活動、地域との連携、各種コンテストなどへの積極的参加の推奨
（6） 文化的・芸術的活動や読書活動の推進
※生徒向け学校教育自己診断における「命の大切さ、人権を学ぶ」の肯定率（R2/90.7%）を令和5年度には92%にする。 (H30/87%・R1/89.9%・R2/90.7%)
「自分の考えをまとめたり発表する機会」の肯定率（R2/84.9%）を令和5年度には92%にする。 (H30/82%・R1/84.7%・R2/84.9%)
3. 学校力のパワーアップ～保護者や地域の連携を大切にし、生徒の生きる力を引き出し育てる学校
（1） 新しい組織の充実 横断化・全体化するためのシステムづくりを進める
（2） 目標と成果の共有、当事者意識に基づく協働の推進による質の高い教育実践のための RPDCA サイクルの定着(各教科・学年・分掌)
（3） 課題別、経験別の職員研修体制の充実を図り教員力のさらなる向上を図る
（4） 教育相談体制のさらなる充実等により、事象の早期発見早期対応につなげる
（5） 広報体制を確立し、生徒の活動の様子や学校の取組みを学校ブログやホームページ等により、継続的に生徒・保護者・中学生・地域等へ発信する
（6） 教員力を最大限に引き出すため、「働き方改革」について整理検討する

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和3年12月実施分〕	学校運営協議会からの意見
【生徒編】 質問全16項目のうち「①そう思う、②どちらかと言えばそう思う」と肯定的に回答した生徒が80%を超えた項目は、今年度は14項目（R2は14項目、R元は9項目）、90%を超えた項目について、今年度は7項目（R2は5項目、R元は1項目）だった。昨年度に比べると、全ての項目の平均値は向上している。 ○「自分は部活動に意欲的に参加していて、成長していると思う」「自分	第1回 書面開催：令和3年8月15日（金）（提出締切日） 1. 今年度の委員・事務局の紹介及び会長・副会長の選出 2. 報告事項 ①令和3年度学校経営計画および令和2年度学校評価について ②令和4年度教育課程（新カリキュラム） ③観点別評価に関する取り組み ④1人1台GIGAスクール構想に関する取り組み （Chromebook 研修）

は学園祭や体育大会など学校行事に積極的で、楽しく参加している」の項目で肯定的な評価が約 90%の高評価である。コロナ禍で学校生活でも制限の多い中で学習以外での面でも一生懸命取り組んで文武両道をめざしている姿がうかがえる。 ○「教育方針や教育計画を分かりやすく示している」が R2は 83.1%、R元は 78.7%だったが今年度は 87.6%になり、学力向上委員会の主導で教員が学習における目標設定について協議し、研究授業を継続しておこなっていることがこの評価につながっていると考えられる。 ○「学校は授業以外の講習や補習など、学力向上のための場を設けている」については昨年度が 45.7%と厳しい数字で昨年の分析では「コロナ禍でのオンライン学習の充実が課題」としていたが、情報部や教務部のオンライン体制の充実や進路部主導での講習計画などもあり 53.5%まで向上。コロナ禍前の 52.1%を超えるものとなった。今後、オンライン授業のさらなる充実や補助教材等の導入等も含め、進路部、学力向上委員会が学年と連携して改善を進めていくことが必要である。 ○「自分で計画を立て、家庭学習する時間の確保」の項目が昨年度は 72.4%、今年度は 73.5%でありコロナでのオンライン授業や休校による課題の提示や生徒の主体的な取り組みがこの数値にあらわれたと考える。 ○「学校で命の大切さや、人権について学ぶことがある」の項目は R2が 90.7%であったが R3は 87.5%に下がっている。3年生の人権講演はコロナの影響で体験のみになるなど当初の計画通り実施できていないことが影響していると考える。 ○「学校生活は満足していて、入学してよかった」の項目は昨年とほぼ同じで 90%の生徒が肯定的な回答をしている。また、「自分は寝屋川高校生であることを誇りに思う」の項目は 82.3%から 87.5%と向上しており、コロナ禍において生徒への細やかな対応や行事での肯定感の高さが自己肯定感を高めることにつながっていると考える。 ○最も大きく向上した項目は「先生は生徒のことを真剣に考えてくれ、信頼している」。今年 1 年の様々な取り組みの結果がこの項目に表れている。 コロナ禍で様々な制限がかかる中、一定今まで以上に防災意識向上のための取り組みや基礎学力を引き上げ、自己実現につなげていくための工夫が必要である。 【保護者編】 全 15 項目のうち「①そう思う②どちらかと言えばそう思う」と肯定的に回答した保護者が 80%を超えた項目は、12 項目（R2は 10 項目、R元は 11 項目）であった。「子供の健康や安全の配慮」がわずかながらポイントを下げた。昨年度に比べると、全ての項目の平均値は向上している。 ○最重要事項である「入学させてよかったと満足している」という項目では、強い肯定が 55.2%（R2は 52%、R元は 53%）、「先生は子どものことを真剣に考えてくれるので信頼している」の項目では強い肯定が 41.3%（R2は 35.3% R元は 34.9%）であり数値は向上しているがこれからも今まで積み上げてきた改善や教職員一丸となった指導を粘り強く続けていく必要がある。 ○強い肯定が 20%未満の項目は「施設設備・学習環境」1 項目でこの項目だけではここ数年続いており、建物の老朽化を保護者から数多く指摘を受けている。また、「学習指導」については 22.5%（R2は 16.5%）、「授業以外での学力増強の取り組み」は 21.1%（R2は 16.3%）と向上しているものの樂觀できない結果である。生徒編にもあったように進路部、学力向上委員会を中心に学年と連携しつつ、補助教材の導入も含めて向上する手立てをおこなう。 ○保護者、生徒共に学校行事や部活動など積極的に参加することについて、肯定度は高いが、「保護者の期待や願いに応える」の肯定が 89.2%で昨年とほぼ同等の割合であるが 90%を超える年度もあったことから、90%に届いていないことを重く受け止め、引き続き生徒一人ひとりの自己実現を大切に作る取り組みを進めていきたい。 ○もっとも大きく減少したのが「学校は子どもの様子を実際に見る機会を設けている」の項目。強い肯定が 20.8%（R2は 27.1% R元は 40.0%）でありここ数年で 20%減少している。コロナ禍で感染症対策を継続しつつ、可能な限り機会の設定を検討する。もしくは Web 上での発信の期間を設けるよう対応する。 【教職員編】 肯定的な回答が 80%を上回ったのは 6 項目で昨年より 1 項目増えた。また、昨年度を上回った項目は 6 項目、下回った項目は 9 項目であり厳しい結果となっているがこの結果を真摯に受け止め、改善を急務としたい。R元から 3 年連続で向上している「教授法や教材研究など自己研鑽の時間や生徒と向き合う時間が確保できている」授業力向上の研修などの結果であると思われる。 ○「教育相談」「人権教育」ともにやや数値が減少した。一昨年度より人権教育推進委員会を設置し、一定の理解を深めつつあるが、75%で十分とは言えない。特に教育相談体制は強い肯定は 16.7%（R2 は 31.9%）と	⑤授業力向上のために取り組み （授業見学週間、学力向上目標達成シート、研究授業計画） ⑥前年度進路実績 ⑦人権教育に関する取り組み ⑧令和 4 年度使用教科書（採択・選定）一覧表 ⑨学校行事に関する報告 （学園祭、修学旅行）⑩寝屋高みらい PT ⑪工事関係 ・外壁工事 ・建て替え工事 —（寝屋川高等学校整備基本構想） 【各委員から意見聴取】 ○令和 3 年度学校経営計画および令和 2 年度学校評価について ・学校長の学校経営方針に基づき、めざす学校像を中核として、細かに具体的目標、数値目標が練られている。 ・PDCA サイクルの評価指標が半数を下回っているものの、昨年度より増加が明らかなので経過を見守りたい。 評価指標として研修後の満足度や活用度のチェックが必要。 ・働き方改革のクラウドサービスを用いた共有方法は、とても理にかなっている。スクラップアンドビルトの考え方では、まずスクラップの部分を重視し、必要性の低い業務を辞めるだけでも効果は高いと考える。 ○学力向上への取り組み ・教科ごとの特性はあるが、めざすべき授業のあり方の教職員間の共通認識は非常に重要で「寝屋川スタンダード」の生徒・保護者に向けての提示をしてほしい。「寝屋川スタンダード」を具現化、具体化するために教員が汗をかくことが必要である。 ・教科指導研究が先達の指導技術の伝承や工夫を後進に引き継ぐ機会になっているのはとても素晴らしい試みで継続が望まれる。 ・ICT 活用については、今後の重要課題であるのが、当たり前になるまで使用頻度を上げる。Chromebook の導入は教員の負担増だが、今から使いこなして、常に自身のアップデートを心がけてほしい。また、生徒はすぐに順応できるが、自発的な力が芽生えるかが課題である。 ○教育相談機能の充実 ・中学から進学した生徒は様々な家庭環境や生徒の個々の状況に応じて手厚い支援や学校全体でのフォローアップを強くお願いしたい。 第 2 回 集合開催：12 月 15 日（水）14:30～17:00 （出席者）4 名 （事務局）9 名（校長、教頭、事務部長、首席 2 名、指導教諭、教諭 3 名） 1. 授業見学 1－4 化学 1－5 英語表現 2－9 保健 2. 報告事項 ①進路部 — 進路中間報告、学習支援クラウドサービス ②研究授業実施報告 ③観点別評価について 3. 協議 ○学習支援クラウドサービス導入について （これまでに導入している委員から活用についてコメントがあった） ・1 人で自主的に取り組めない生徒へのアプローチを工夫する必要がある。 ・教員で利活用の差が出るので、定期的に研修を実施して教員のサポートをする必要がある。 ○研究授業 ・資料から先生型のコミュニケーションのあり方が進歩しているように見受けられる。 ・委員より観点別評価との関連について質問があり、担当からは観点別評価との関係では意図的に仕向けたわけではないが、部分的にそうだったとの回答。 ・先生は一国一城の主になるからなかなか改善点を言いにくい、そういうことを言い合える雰囲気的大事で、一国一城の主である人の考えをどう変えていくかが課題である。 ・カリキュラムマネジメント、教科の壁 単元を学んだ最後に生徒がアウトプットするようなものを廊下に貼ることで、他の教科でやっていることをお互いに知れた。教員の教科の垣根を超えた会話が生まれた。 1 年生の廊下に 3 年生のノートを貼ることで良い効果が生まれた。教員間でも「この授業はどうやったの？」等という会話が生まれた。 ・小中学校で対話的な授業を受けてきた子たちなのでやらせてみると意外と積極的にできるのではないかと、寝屋川高校が大阪の改革の先陣を切ってほしい ・先生が変わるのは難しいかもしれないが、逆にチャンスである ・先生の授業が主役、学習支援クラウドサービスの授業に負けない授業をしなければいけない ・寝屋川高校のスタンダード、軸がきっちりしていれば生徒は安心するのではないかと（委員のコメントに対して以下の回答） ・研究授業の成果として、年代問わず付度のない協議ができている。 ・教科の垣根をこえた取り組みがしたいと強く思っている。 ・一方方向の授業が多い中でスタディサプリ等を用いて反転授業等を行っていきたい。 ○観点別評価 ・寝屋川高校として観点別評価の柱ができたときに研究授業は良い効果を発揮すると思われる。 ・中学校での観点別評価の導入当時、先生方は悩んでいた。また、主体的対話的で深い学びにどうつなげるのか苦心していた。高校ではまだ教員が一方的に話す授業が多いのではないかと。中学校では基本的なことを教えないとできないと悩みながらやっってい
--	---

大きく減少していることは来年度に向けて大きな課題である。生徒に寄り添いながら、生徒の観察及び指導が組織として徹底されるように改善点を探したい。 ○「指導内容や指導方法の工夫・改善に努めている」については、94%と高い数字となっている。(R2は93.6%) 授業力向上委員会の引き続き授業研究の取り組みを進めていく。 ○一方で、「生徒の学力伸長・進路実現」については強い肯定が13.9%。昨年より約10%も落ち込んでいる。「③どちらかといえばそう思わない④そうは思わない」が33.3%いることも組織として取り組む姿勢が問われている。 ○「生徒の健康・安全」は保護者と相反して91.7%と高い評価となっていて2年連続90%を超えた。とくにコロナでの生徒への働きかけが影響しているかも知れないが、今後継続し徹底していくにはどうすべきかが課題となっている。 ○「各教科での学習指導計画・評価に対する十分な議論」では数値が落ち込んでいる。これは観点別評価が始まる来年度に向けて必要なことであるが、コロナ対応でなかなか議論の時間が取れないことも影響していると考えられる。来年度は教科内で時間をなんとか見つけて情報共有するべく取り組んでいきたい。 ○「学校の教育目標が共有され、全員で協働して、組織的に教育活動に取り組んでいる」では否定が36%。「学校は生徒の学力伸長や進路実現のために一体となって取り組んでいる。」では否定が33.3%になっている。組織としての一体感をもち、チームとして機能するために職員室の配置も含めた様々な検討課題に取り組む必要がある。	る。 ○進路について ・進路の中間報告に関して、公募推薦での合格人数が増えていることで最後まで粘り抜く指導とのつながりを問う質問。 ・一般選抜（特に後期まで）にチャレンジするように生徒の背中を押してやってほしい(委員のコメントに対して以下の回答) ・公募推薦は絶対にいかないといけないものではなく合格を持って一般選抜に臨むことができるので、合格を持って上の学校に臨む、自信をつけて臨むよう指導している。 ○その他 ・将来どうなりたいのか、どう学ぶのか、選択肢を増やすために勉強しているのだということを生徒にわからせないといけない。 ・やればやるほど壁にぶつかる、それをどう乗り越えていくか。 第3回 書面開催：3月1日（火）（提出締切日） (1) 「教員の授業とその他の教育活動に関する意見書」について (2) 令和3年度学校経営計画の評価および令和4年度学校経営計画 令和3年度学校経営計画の評価 令和4年度学校経営計画 (3) 後期授業アンケート報告 (4) 学校教育自己診断 報告 (5) その他の報告 ①人権に関する取り組み ②みらいPT ③食堂プロジェクト ④学習支援クラウドサービス 【各委員から意見聴取】 ○学校経営計画 ・コロナ禍において様々な点で取り組みが難しい中であつたと思うが、粘り強く実施することで教員間に共通認識が育まれていくことを考える。 ・1人1台端末について日々更新してよりよい教材作りが大切である。 ・学力向上に向けて、ICT 機器や講習・補習の取り組みは評価できるが、来年度の観点別評価のスタートに向けてどの程度準備ができていくか気になる。今回の新学習指導要領では学力ではなく「資質・能力」の要素を学習の中でどう見取るかが重要だと思う。納得と信頼の学習評価をどうつくるか、全教員でおさえる必要があるかと思われる。 ・伝統校としての小中学生や保護者の憧れの存在である寝屋川高校だが、生徒会活動等により、市内の中学生との連携を深め、より身近に感じることができるよう取り組みが進み、情報発信が進んでいけば、寝屋川高校のブランドが高まると思う。 ○授業アンケート ・自由記述欄のコメントを精査して、妥当と思われるものや実現可能なものから改善していくことが望まれる。 ○学校教育自己診断 ・教員数の回答率の上昇に向けて仕組化が必要であると思う。 ・生徒も保護者も「入学してよかった」の項目が上昇していることは学校全体の努力の成果だと思う。また、「寝屋川高校生であることを誇りに思う」の項目の向上は大きな特徴であり、このことを外部にも発信していくことがよいかと思う。 ・個人的な指導に関するものはポイントが高いようだが、組織としての目標など全体に関するもの、観点別に評価など新しいものに抵抗がある印象をうける。 ・家庭学習の数値が課題である。 ○人権に関する取り組み ・多様な価値観に触れる機会は、思春期青年期の生徒たちにとって、今後の可能性を考える貴重な機会だと思う。生徒の感想文から取り組みの成果が表れていることが伺え、継続を望む。 ・経験年数の少ない教員が増える中、人権に関する教員の資質向上が喫緊の課題となっており校内研修はもちろん、教育委員会主催の研修等による教員の資質向上が必須となってくると思う。 ○みらいPT ・参加している教員の意識を全教員に広めていくことが今後の寝屋川高校の力になっていくものだと感じた。 ・意識ある先生1人1人が学校の課題について考えを出し合い、忌憚のない意見を話せる場を持とうという、まずはその行動力とエネルギーに感服した。こういった場がミドルリーダーを育て、新たな寝屋高の可能性を輝かせていくと思う。是非とも続けていただきたい。 ○食堂プロジェクト ・生徒会主催で、全日制生徒と定時制生徒の交流を図り、社会福祉法人と連携するなど全日制、定時制併設の高校にしかないユニークな取り組みである。 ○学習支援クラウドサービスについて ・自学自習の契機とするにはよい取り組みである。一方で普段の教員の授業方法との差について戸惑う生徒がいるかもしれないが、「メインデッシュ」は日頃の先生方の授業であり、学習支援クラウドサービスは「前菜」であり、「デザート」的なものになるのだと思っている。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R2年度値]	自己評価
1. 学 力 を 伸 ば す	(1)「寝屋川スタンダード」の策定 (2)テンミニッツの活用による学習習慣の定着 (3)ICT 機器やタブレットの活用、授業形態や授業方法の研究で系統的・効果的な教科指導の確立 (4)公開研究授業（内外）など研修の実施で「授業力」向上 (5)講習、補習の計画的実施 (6)新学習指導要領、大学入学共通テストに対応した準備と対策	(1)学力向上委員会の組織を機能的に運用する。 各学年・各教科で3年間の学習目標と計画を策定し、生徒・保護者に示す。 授業の実施にあたっては、共通事項を決め実施する。 (2)始業前の10分間を学習習慣定着の時間に充てる。 (3)ICT 機器やタブレットを積極的に活用することで、授業のわかりやすさや効率・集中力を高め、主体的に取り組む態度を育成する。 ICT 活用促進のための研修を実施する。 学力向上委員会と情報部が共同で実施し、相互の教員力向上を図る。 (4)公開研究授業・研究協議を全教員で実施し、「授業力」の向上を図る。 (5)講習を計画的に実施し、授業以外のサポート体制を充実する。 (6)新学習指導要領の研究、主旨を全職員で共有し新しい教育課程作成に取り組む。 進路部が中心となり、大学入試についての分析をおこない、本校生徒について、データ化し、進路指導に活かす。 模試のデータを活用し、学年ごとの目標値を設定。『最後まで諦めない』粘り強い指導を行う。	(1)すべての教科において研究授業・研究協議を実施（教職員自己診断）組織的に取り組む70%以上 [68.8%] 学校教育自己診断(生徒・保護者)「方針や活動・計画を分かりやすく示している」生徒85%保護者89%以上 [83%・88%] (2)授業アンケートの「授業に集中」の項目で88%以上 [87.6%] (3)生徒向け学校教育自己診断における、授業に関する満足度「教え方の工夫・授業がよくわかる」86%を維持する [86.6%] 相互授業見学週間の実施 全教科での研究授業の実施 (4)大学入学共通テストの全国平均に対する得点率R2年度比で5%アップ (5)生徒向け学校教育自己診断の「講習や補習」87%以上 [87%] (6)進路指導部を中心とした検討会議を定期的の実施し職員で共通理解の場を作る。 学校教育自己診断(教職員)「各教科において学習指導計画や評価について十分な議論がなされている」85%以上 [83.3%]	(1)昨年に引き続き、研究授業・研究協議を実施。研修の参加状況とアンケートでは肯定的であったが、組織的に取り組む協働性の部分が十分に準備できなかった。「組織的に取り組む」63.8% (△) 「方針や活動・計画を分かりやすく示している」生徒87.6%保護者84.8% (△) (2)テンミニッツの発展的解消として、各学年において週末課題を実施。87.5% 家庭学習を定着させる事も目標としており、「家庭で学習する努力をしている」は73.5%で昨年度より1.1ポイント増えた (○) (3)5月には全教員に、9月には生徒にタブレットを配布。校内にアクセスポイントを設置し、広範囲でタブレットがインターネットに接続出来る環境を構築した。 「教え方の工夫・授業がよくわかる」90.8% (◎) 5月、11月に相互授業見学週間の実施。 (4)学力向上委員会の3年めの取組みが定着してきた。今後も継続して取組んでいく。 今年度全国平均を13%上回っている。 昨年比では4%アップにとどまっているが、全体的に難化している中でよく頑張った。(○) (5)コロナ禍で、計画通り実施できない状況もあったが、3年生では夏期11講座で計99時間実施、各学年で土曜講習を実施した。1年生においては、上位層を伸ばす講習を実施するなど、新しい取組みに挑戦した。 「講習や補習」91.9% (◎) (6)進路部において、データの活用に向けた整理ができ、次年度の活用実施に向け準備している。 各学年振り返りなどをドライブ上に蓄積している。 「各教科において学習指導計画や評価について十分な議論がなされている」88.9% (◎)

府立寝屋川高等学校

2. 能動的に学ぶ姿勢を身につける	(1)進路指導機能の向上 (2)生徒主体の活動の充実で自立心や主体的に行動する力の育成 (3)人権尊重の精神や国際感覚の涵養 (4)生徒のコミュニケーション能力の育成 (5)社会貢献やボランティア活動、各種コンテストなど積極的参加の推奨 (6)文化的・芸術的活動や読書活動の推進	(1)基本的な生活習慣・規律（挨拶、時間、清掃、感謝、貢献）が将来の進路実現に繋がることを日常的に全職員で指導に当たる。 学年団を中心に、総合的な探究の時間を活用し、将来の職業選択に生きるキャリア教育を進める。 (2)生徒会中心に全日制と定時制の連携を図り、協働の取組を行う。 近隣の小中学校や地域との連携の方法を模索し実施 (3)人権研修の在り方を探究委員会で検討し、全体計画を作成する。 3年間を見据えた人権教育の構築と組織的な国際交流活動の充実 (4)タブレットを含む ICT 機器を活用し、プレゼンや発表の機会を校内外で実施する。 (5)授業や部活動を通してコンテストに参加を積極的に呼び掛け、機会を多く設定する。 寝屋川市や市内中学校、福祉施設など外部との連携交流推進 (6)2年生の芸術鑑賞、3年生の文楽鑑賞のほかに文芸 G が中心となった読書マラソンや各種コンテストにチャレンジを呼びかける。	(1)全職員で実施 生徒の学校教育自己診断「進路選択について相談する機会」88%を維持 [87.7%] (2)生徒の学校教育自己診断「学校行事に積極的に楽しく参加」90%を維持 [90.9%] (3)人権教育の評価(生徒) 90%を維持 [90.7%] 考えをまとめ発表する機会(生徒) 85%を維持 [84.9%] (4)総合的な探究の時間、修学旅行プレゼン、人権探究学習、英語スピーチコンテスト等の実施 肯定 85%を維持 [84.9%] (5)校内コンテスト実施 外部のコンテスト等への参加および参加促進 寝屋川市や小・中学校との様々な連携 (6)全員対象の読書コンクール 読書マラソンの実施	(1)1年次に自分の適性を知り、2年次に志望校を決定し、3年次に戦略的な受験計画を立てるという目標を設定し、3年間を見通した進路行事を設定できた。また、各行事で学んだことや感じたことを(学習支援クラウドサービス)を用いて保存し、振り替えられる仕組みを構築。「進路選択について相談する機会」88.5%(◎) (2)コロナ禍であったが、学園祭、体育大会とともに、例年教員が担っている役割を生徒会が計画実行し、特に体育大会においては、事前に他校での実施種目等を調査し、新たな種目を計画実施し、様々な委員会を巻き込んで運営できた。定時制や、社会福祉法人との交流も、外部との交流が厳しい中、計画は進行している最中。「学校行事に積極的に楽しく参加」92.3%(◎) (3)コロナ過で予定を変更せざるを得ず、生徒の人権学習においては、Web 会議システムの活用で理解を深めた。 「人権教育の評価」87.5%(△) また、国際交流においても、Web 会議システムを活用し、姉妹校交流ができ、生徒の国際感覚を高めることが出来た。大阪府国際化実践的英語体験活動推進事業であるグローバル体験プログラムに3回延べ人数 49 名が参加し、事後アンケート結果では「海外への興味が深まった生徒」が 100%であった。また、高大連携先大学及び他の大学や校内の海外滞在経験のある教員を招いた交流イベントも実施し、生徒の海外への興味関心を高めることができた。「考えをまとめ発表する機会」88%(◎) (4)無線環境の整備・管理等を実施。教科の授業、探求等で、教員や生徒が整備した端末を活用している。 各学年の探究の時間において、事前に時間をかけてデータの分析方法や結論への導き方等の学習を重ねて、研究発表にのぞんだ。事後のアンケートでは「達成感がある」という回答が 85.5%であり、一定の学習効果があった。「発表等に関する肯定」88%(◎) (5)部活動リーダー研修を今年度から導入し、各クラブの代表者で寝屋川高校をよくするための話し合いを行い、悩みを共有し、そのための解決策の検討を行った。コロナ禍のため、実際に外部との積極的な関りを持つ活動は行えなかったが、外部との交流に関する意欲はよく見られた。来年度には具体的な活動も検討していく。 1年生については、8テーマにおいて、学内コンクールを経て、8チームのプレゼンテーションを「SDG s みらい甲子園」の本選に応募した。(◎) (6)読書マラソン(申し込み 21、達成 9)昨年度に比べ申し込みが少なかったものの、達成数、達成率は上昇した。図書館系の教員の丁寧な指導により、生徒も充実度も高かった。(◎) 【読書感想文コンクール】 「第 67 回大阪府青少年読書感想文コンクール」入選；1 作品 本年度、入選作品がでた。 芸術鑑賞については、事前に大まかなあらすじや人物相関図を確認する時間をとって鑑賞にのぞんだ。事後アンケートによると、「今回の公演がとてもよかった」という回答が 77.6%、「3 年生での学園祭(演劇)に向けて、参考になった、イメージが膨らんだ、意欲がわいた」という回答が 78.1%となり、生徒は文化・芸術活動を味わうだけでなく、それを活かそうとする姿勢也大いに見られた。(◎)
-------------------	---	---	--	---

府立寝屋川高等学校

3. 学校力の パワーアップ	(1)新分掌の充実と横断化・全体化するためのシステムづくり	(1)「寝屋高みらいPT(仮称)」を組織し、学校の課題を洗い出し内外に向けた魅力化を図る。めざす学校像・育てたい生徒像を共有する機会を常に設け、教育全体を見据えた業務の連携を探る。	(1)目標共有にかかる職員自己診断結果 70%以上 [68.8%]	(1)コロナ感染症対策で業務全体が逼迫した状況で、思うように進めることが出来なかったが、年度当初に進路部として進路目標・各学年目標を設定し、教室掲示や進路日より、全校放送等で周知できた。「目標共有にかかる職員自己診断結果」64% (△)
	(2)目標と成果の共有と RPDCA サイクルの定着	(2)学校教育自己診断、学校運営協議会の意見等を学校運営改善に反映させる。各学年・分掌・委員会の「総括」から、個人だけでなく、組織(分掌・学年等)目標を立てた取組みにする。	(2)RPDCA サイクルにかかる職員自己診断結果 45%以上 [39.6%]	(2)年度当初に進路目標を設定し、職員会議等で共有した。進路行事や土曜講習でアンケートを実施した。今後総括し、次年度への取り組みへつなげていく。「PDCA サイクルに沿った改善志向」58.2% (◎)
	(3)職員研修の充実による教員力の向上	(3)次代のミドルリーダーとなる教員研修の実施。現ミドルリーダーをけん引役として実施し相互向上を図る。経験の少ない教員に対しては、地域行事や学校説明会等に積極的に参加させる。府教育センターの研修や、大学と連携した研修、校内研修により継続的な教員の資質向上を図る。	(3)実施回数と振り返り 5 回以上	(3)コロナ感染症対策が急務とされ、非常勤講師・定時制教員を合わせた全教員での研修を年 3 回実施し、指導教諭はじめミドルリーダーが中心となり、様々な場面(授業及び総合的な探究の時間など)の活用方法について全教員にアプローチしてきた。また、進路指導における面接指導では経験年数の少ない教員と経験年数の多い教員をペアとするよう考慮し、実際の指導を通してアドバイスをを行った。(△)
	(4)教育相談機能の充実	(4)教育相談にかかる理解を深める機会を増やし常に共通理解に努める。ケース会議や SC による教員研修の実施。	(4)職員自己診断結果(教職員) 80%以上 [78.7%] (生徒)80%を維持 [80.4%]	(4)昨年と比較し養護教諭や SC とも連携し、特に学校全体で支援を検討すべき生徒に関しては、情報共有や支援を丁寧に行えたと感じる。今後については、実例が積みあがっていく中で、教職員間の共通理解に努める必要がある。ケース会議や SS 会議などが機能的になるよう次年度に向けて進めていく。(教職員)72.3% (△) (生徒)83.4% (◎)
	(5)学校広報と情報発信機能の充実	(5)学校紹介 PP や学校案内(次年度向け)のリニューアル 寝屋川市や地域との連携で生徒の活動を支援する。	(5)生徒や経験の少ない教員なども参画し、学校案内の改定、HP の内容の生徒の活動等における更なる充実を図る。 寝屋川市や地域と連携した生徒会活動 学校行事に積極的に参加している 90%を維持 [90%]	(5)これまで、クラブ顧問に任せていたクラブ活動のページのブログ更新において、更新ペースに顧問間で温度差があったため、最低年 1 回は校内機関誌の記事内容を活用して更新することとした。学校 HP の更新頻度が上がることで、より充実した学校 HP となった。また HP 内の記載内容についても再度精査し、最新の内容が表示されるよう記事を更新している。 全定協働プロジェクトを通して、定時制、社会福祉法人との交流が実施できた。「学校行事に積極的に参加している」92.3% (◎)
	(6)「働き方改革」の検討を進める	(6)働き方改革について検討する。 各学年、分掌内における業務の精査	(6)時間外勤務時間を昨年度比 5 %減 [7 %]	(6)各分掌・各学年等における業務について、運用方法について工夫が見られた。 時間外勤務について、前年度比(4～12 月)では平均で 1 h 減 (41h→40h)。2.5%減となった。 但し、昨年度は 4、5 月が休校措置で時間外勤務が 12 h (4 月)15 h (5 月)であった。通常勤務となった 6 月～12 月を比較すると平均は 49h→39h となり、5 %は大きく減少している。また、80h 超えの教職員数は 4～12 月比較で 88 人→66 人となった (○)